

第2言語習得論から見た英語学習法

静岡大学教育学部
白畑 知彦

皆さん、こんにちは。静岡大学教育学部の白畑と申します。よろしくお願いいたします。

今日は『ことばを学ぶ』ってどういうこと？ 第2言語習得論を外国語学習に活用する：第2言語習得論から見た英語学習法」というタイトルを与えられましたので、これに基づいてお話ししたいと思います。それから、私の今日のこのパワーポイントの資料は皆さんのお手元に届いていると思いますので、そちらも参照くださればと思います。

まず、学生さんは手を挙げてください。（学生は手を挙げる）はい、わかりました。どういった方がいらっしゃるのかよく分からないのでちょっとお聞きしました。それによって私の話の中身も少し変えないといけないと思っていたので。できるだけイントロダクション的なお話にはしたいと思いますが、今日の内容は、ことばの学習を研究する第2言語習得研究から何が分かってきたかということと、日本にしながら英語能力を効果的に伸ばす、そのような、すごくいい方法があるかどうかというお話をしたいと思っています。お話しする時間が1時間なので、必ず14時15分までには終わりたいと思います。

それでは始めたいと思います。まず、「第2言語習得」という専門用語をご存じのかたも大勢いらっしゃると思いますが、英語では、「Second Language Acquisition」といいます。この言い方が一番普通で、略してSLAとか言ったりもします。次に、では「第2言語習得研究」というのは何だろうということになりますが、これは簡単にいえば、私たちが母語に次いでことばを習得するとはどのようなことなのか、そして、それはどのような過程をたどって習得していくのか、そのメカニズムを探求する学問領域のことを言います。

第2言語習得というものがあるわけですから、第1言語習得というのも当然あるわけです。しかし、あまり「第1言語習得」という言い方はしなくて、「母語獲得研究」といったりするのが普通です。第2言語習得のほうは「習得」にして、こちらは「獲得」といういい方をしたのは、日本語での表現の問題といえば問題なのですけれども、母語は「習得する」、つまり「習って覚える」ということ自体が不自然であり、ほぼ無意識のうちに獲得していくわけで、やはり「獲得」という表現を私は使います。第2言語のほうは、様々な学習状況がありますけれども、やはり「習得」という言い方のほうがふさわしいかと思っていますので、こちらを使っています。

ということで、要するに第2番目以降の言葉を覚えていくときに頭の中で何が起きているかということの研究するのが、第2言語習得研究の本来の研究姿勢ですね。そのような研究姿勢が、もしうまくすれば、外国語教授とかそのようなものに応用できればもっといいということです。

母語獲得のときというのは、ゼロ歳児から、生まれてからみんな「ヨーイドン」でやるわけですね。もちろん、誰も「ヨーイドン」といった号令は掛けられないけれど、学習開始年齢はみんな一緒なわけです。それから、身体の状態もみんな一緒ですね。赤ちゃんの身体の状態ということです。一方で、母語獲得とは大きく異なり、第2言語習得のときはいろいろな要素が複雑に絡まってきますね。ですので、どのように習得していくのかを研究することが難しくなります。何歳から学習を開始したのかとか、どこで学習しているのか、教師から教科書を使用して習うのか習わないのかとか、そのようないろいろな要素が入り交じっていて、母語獲得研究とは異なり、考慮すべき変数がとても多いため、学習者要因がきれいに整理できなかつたりして、研究するのがとても大変です。化学の実験と異なり、意思を持つ人間相手です。

こういう困難はあるものの、二つ目の言葉をわれわれが覚えるとき、頭の中がどのようになっているか明らかしようとするのは面白いテーマだと思うのです。我々人間の認知ということを考えてときに、ことばの習得をとおして研究することはおもしろいことだなと思っています。それは、脳みそに直接メスを入れて解剖して調べても分からないということですね。脳を取り出してみても分からないので、やはりことばに関するさまざまなデータを取って、それを分析していくというのが、時間はかかりますが最も確実な方法の一つです。もちろん、現在ではいろいろなもの、PET (Positron Emission Tomography) や MRI (Magnetic Resonance Imaging) といった機械があり、脳内を画像や脳波で調べることはある程度できるようになりましたけれども、そのようなものには今のところ限界があります。

さて、「第2言語習得」ということばと「外国語学習」ということばでは、皆さんは「外国語学習」のほうが一般的だと思うかもしれません。私たちが学校の教室で習う英語は、これは外国語学習といえますね。学校の教室で習うのは外国語学習。でも、これも広い意味では「第2言語習得」という領域の中に含まれる、要するに第2言語習得の一部だということに我々はとらえています。「第2言語習得」というのはいろいろな場面があって広い範囲を網羅した言い方で、そのうちの一部分が外国語学習ということですね。

そのようなことで、「第2言語習得研究から、これまでのところ、本日の話に関係する内容において次のような事実が明らかとなっています」というお話を今日の最初の部分なのですが、それは私と若林茂則さん、須田孝司さんの3人で2004年に書いた本の内容を基にしています。

今日のパワーポイントの資料の中で、省略して「SLA」と書きましたが、これは第2言語習得(Second Language Acquisition, SLA)という意味です。まず、このスライドを見てください。この研究成果(1)に書きましたように、「少なくともある一定数の文法項目の間には、一定の習得順序がある」ということから始めます。つまり、私たちは母語のみならず第二言語もでたらめな順序で勝手に覚えていかなないということですね。ちょっと信じられないかもしれませんが、教室で学習するときもそうです。習得順序の存在というのは、外国語学習の場合にも当てはまるわけです。中学生や高校生は、学校で教科書を使用して英語を学習するのですが、彼らの習う順番に文法を覚えていかなないということなのです。つまり、難しい項目は早い時期に学習したとしても、いつまでも難しいのです。これが明らかになっています。ただ、なぜある文法項目が他の文法項目よりも「難しい」のか、それはとても難しい問題なのですが、そのお話はとてもテクニカルになるので今日はやめておきます。

私たちは中学や高校で英語を習いますね。で、そこには教科書の限界があって、どうしても順番に教えていくしかない。それで、ともかく文法事項が順番に並んでいますね。いっぺんにバツと教えられるわけがないので、何か簡単そうなものを最初のほうに持って行って、難しくなものをおとりに持っていくというような感じで作っている場合が多いわけですね。あとはコミュニケーション活動がしやすいかどうかというのも最近の教科書は重視しています。このような順番は、母語獲得や第二言語習得でもたとえば「アメリカで日本人が英語に接触する場合」とは全く異なります。そのような場合には、教えてもらう順番などありませんよね、全部いっぺんに聞くわけですから。

さて、これまでの多くの研究成果から、教室での外国語学習の時ですら「習ったら覚える」というようにはならない、ということが分かってきています。「教師が教えたらすぐに学習者は覚える」などという、そのように単純ではないということです。もしそうだったらすごく便利ですが、そのようなわけにはいかない。だから、教えても教えてもできないものがあるということです。教えても教えても教えても、できないものがある。中学1年生で習っても難しくてなかなか習得できないものがある。逆に、高校生で習っても簡単にできるようになるものもあるということ。

それで、日本語母語話者には英語の何が難しいかということ、まずaとかtheといった冠詞ですね。皆さんどうですか、英語の冠詞。なかなか手強いでしょう。それから名詞の複数形。物質名詞や抽象名詞の複数形はとても難しいですね、もちろん簡単な複数形もありますよ。たとえば、普通名詞の複数形。Appleの複数形は、リンゴが3つだったらthree applesですよ。でも複数形というのはそのような簡単なものばかりではなくて、例えば今、この教室の天井に明かりがついていますけれど、この「明かり」、これは「light」といいますね。でも、これはカウナブルな名詞になったり、アンカウナブルな名詞になりましたけれど、ご存じでしたか？ Lightの表す意味の違いによってlightがa lightとなると、なつてはいけなないときがあります。さらに、もっといろいろ複雑な複数形がいっぱいあるということなのです。物質名詞や抽象名詞の複数形などというのは、もしかすると、ほとんど完璧に習得できるのは日本人には難しいのかもしれないですね。そして、冠詞。私は、これも自慢ではないですが、今もってよく間違えます。

でも、名詞の複数形も冠詞も、両方とも中学1年生で習うものですね。なぜ中学1年生のときに習っても難しいかということです。だから逆に言うと、冠詞を完全に覚えさせようと教師が一生懸命にずっとやっても無駄だということです。とても無駄な時間を英語の時間に費やしていることとなります。冠詞や複数形を生徒が間違えても教師は気にしないことです。減点しない

ことです。なぜかという、実はそれらの文法はとても難しいから。

したがって、今日は教職につかれている先生方が大勢いらっしゃいますが、先生方に申しあげたいことは、「外国語学習は教師が教えたら覚えるなどという単純なことではないよ」ということです。3単現の「-s」を1か月、ずっと教えていた先生がいらっしゃると私の友人が言っていたけれども、そのようなことは私からすると、「他のこと、たとえばいろいろな意味あるアクティビティ、をやったほうがずっと英語の勉強になるのにね」となります。

さて、英語には文法形態素というものがあります。これは、-ed とか-ing といった「文法的な意味を持つ最小単位」のことですが、同じように動詞と関係する形態素でありながら、進行形の-ing は、3単現の-s や過去形-ed より学習が容易なことが多くの研究成果から明らかになっています。-ing はとても簡単に習得できる文法形態素です。動詞に関し、次に簡単なのは不規則動詞の過去形です。続いて規則動詞の過去形-ed が来ます。不規則動詞の過去形のほうが規則動詞の過去形よりも容易なのです。ちょっと不思議に思われるかもしれませんが、これは事実です。そして、いつまでも落としてしまうのが3単現の-s です。3単現は規則的にはものすごく単純にもかかわらずです。そうですよね、3単現の-s というのは、規則自体はすごく簡単でしょう？3人称・単数形・現在の場合には-s をつけなさいというだけです。このようにとても簡単なのに、大学生になってからも落としたりします。特に発話のときにはよく落とします。このようなときに我々は、「うっかり間違い」とか、「ケアレスミス」とか言ったりしますね。でも、このような場合の「うっかり間違い」というのは一体何だろうということです。「うっかり間違い」をする文法項目と、全くしないものがあるのに、するときだけ、「うっかり間違い」ということばを使用します。要するに、言いたいことは、誤りをこういうことばでごまかしてはいけないということなのですけれども。

そして、さらに面白いことに、英語の文法形態素の学習困難さの順番というのは万国共通なのです。万国共通というのは、フランス語を母語として英語を学ぶ場合も、中国語を母語として英語を学ぶ場合も、日本語を母語として英語を学ぶ場合も、不思議なことに、この動詞と関係する文法形態素の困難度が共通しているという意味です。

もちろん、全ての文法形態素の習得困難度が万国共通であると言っているわけではありません。そうだととても面白いのですが、それは違います。学習者の母語が強烈に影響を及ぼす場合もあります。さらに、先ほどもちょっとお話ししましたが、もう一つ面白いことに、英語という動詞の過去形なのですけれども、不規則過去形のほうが規則過去形より学習が容易であるということも面白いですね。要するに went とか、came とか、そのような不規則過去形のほうが、ただ単に動詞に-ed をつけるよりも習得が容易ということを知ると、「え？そんなばかな」と思ってしまうかもしれませんね。でも、事実です。

次に行きましょう。次は、SLA研究成果（2）です。今の（1）と関連して、外国語を教える教師は、「教師から直されても、いつまでたっても直らない誤りがある」ということを知っているべきだと思います。直しても直しても、また間違える文法項目というものがあるということです。修正。ここでいう修正というのは、先生から、「これは違うよ」と教えられて直すことを意味します。しかし、この修正が全く役に立たない場合もあるのです。そうすると、このことから教える先生への示唆として何が言えるかということ、「生徒の誤りを全部直しても無駄だ」ということです。したがって、生徒の書く誤りのすべてを直すようなことをやっているのなら、もっと生産的な何か他のことをやったほうが良いということです。

もう一つ、ついでに申しあげますと、ちょっとくどいかもしれませんが、教師は生徒の誤りを直したいのなら直してもいいけれど、同じ生徒がまた同じ誤りをしたらからといって、その生徒に文句を言うてはいけないということを申し上げたい。「また間違えたな！」とか、そのように小言を言うてはいけない。なぜなら、第二言語学習者は誤りを繰り返すものですから。特に、習得の困難な項目はずっと間違い続ける。そのような外国語習得のメカニズムを、教師があらかじめ知っておくことが大事でしょう。したがって、誤りを直すのは自由だけれども、直らなくても生徒に文句を言うてはいけないということになります。外国語学習のメカニズムを知っていて教える教師と、そのような知識を全く知らずに教える教師では、生徒への接し方がずいぶん異なると思います。外国語学習のプロセスは数学や理科の学習過程とは全く違うのです。

また、誤りを直すのをよくやるのですけれども、直しようのない誤りもいっぱい出て来ますよね。たとえば、パワーポイントにも載せましたが、この、I sunny personality. I am a good

point of character on tackle to serious. Because, I don't rest school. という英語、どうですか、みなさん？これ、直しようがないでしょう。この英文は実際に大学生が書いたものです。フロアにいらっしゃる英語の先生は、「ああ、見たことがある」と思われるでしょう。この英文はどういうことを伝えたかったかというと、最初の英文は、「僕は明るい性格です」と言いたかったと、あとで本人に聞きました。ああ、確かになんとなくわかりますよね。そして次の英文は、「僕の性格のいい点は一生懸命に取り組むことです。なぜなら、僕は学校を休みません」と言いたかったそうです。

学習者がこのような英文を書いたとき、どうしたらいいのでしょうか？これはその場で直しようがないですよね？これをもし正しい英文に直すのだったら、a sunny personality は、I'm positive. とか、I'm cheerful とかになりますかね？その他、いろいろあるかもしれませんが。ともかく、この英文を直すのはなかなか難しいですね。それで、もしこれを直してあげても、この学生はその直された訂正文を理解できないかもしれませんね。ですので、このような子たちの書く英文の誤りを直そうと思っても、割と時間の無駄になってしまう気がします。それはよくないというか、時間ももったいないのではないかということが、第2言語習得の研究成果から言えることです。このことについては、私と鈴木孝明さんの本（『ことばの習得』くろしお出版、2012年）にも書いておきました。

さて、(3)に行きます。これは、『聞くだけ』で第2言語習得は伸びない」というものです。そういう英語教材の宣伝もありますが、一般的に言えば、英語を聞くだけで一般的な英語能力（聞く、話す、書く、読む力）が伸びたりしません。宣伝に出演しているあのゴルファーはいいのです。なぜあの人はいいかというと、それは簡単で、あの人は現地に行って実際に英語を使うときがあるからです。ですので、その復習を兼ねてたくさん英語を聞くことは良いことでしょう。しかし、日本にだけいる場合は、たんに英語を聞くだけで総合的な英語力を身につけることは無理ですね。何が欠けているか、つまり何が大事かということ、「ことばの使用場面」というのが必要なのです。これは言語習得の、もう本質的なことなのですが、ことばを習得するためには、その使用する状況とか場面がないとだめだということです。どのような場面でどのようなことばを使うのかということがわかっていないと、やはりものすごく時間がかかるということか、言語習得が不可能とは言わないけれども、とにかくものすごく時間がかかるということです。

ですので、言語というのは、あとでも出てきますけれども、音声ですね、基本が音声で、それでその音声の意味を伝えるわけで、そのときに、でたらめな順番や規則で話してもだめなわけで、そこに文法（規則）が必要になってくるということですね。文法というのは、正しく意味を伝えるために使う装置なわけです。だから、ことばを使用するためには意味と文法と、それから音声という3つが揃っていないといけません。したがって、われわれが外国語を学習する際にも、そこに必ず意味を伴った活動をししないと、一生懸命勉強した割には能力が伸びないということになりかねません。勉強した割には習熟度が上がらないということは、意味を伴う活動を重視しない時に起こります。これは、再び、時間の無駄です。

それで、外国語学習のときは、意味を伴う活動をするという点在实际は難しいところですね。たとえば、あとで大関さんがお話しすると思いますが、日本で日本語を学習している人たちというのは、使う場面があるので結構いいわけですね。だからそのような場面が、日本で、教室で英語を学ぶとどうしても少なくなる。教室ではそういう状況を作りづらくなる。したがって、教師は、いろいろと頭を悩ましながらも、できる限り、意味を伴う場面を設定してあげないといけません。ということが言えると思うのです。ここで、工夫が必要ですが、プラス思考的な物言いをすれば、ここが教師の腕の見せ所かもしれません。

あとで音読の話をしていきますけれども、たんに聞くだけではなくて、スクリプトを見て英文の意味を確認しながら音読する方法は結構いいのではないかと思います。ですので、ちょっと話は戻りますが、例えば日本で生まれた5歳の子が英語のCDの音だけをずっと聞いていても、英語ができるようにはならないです。それは100%言えますね。英語の音には慣れるでしょうけれども。英語の全体的な力はCDを聞いているだけではつきません。まだ映像のあるテレビのほうがいいですね。テレビの中から英語が出てきて、その使用場面がわかるからです。ただし、テレビは一方通行なので、やはり限界はあります。

それで、子どもも同様ですが大人が日本で暮らしている場合、ただ英語を聞いているだけでは英語能力はつきません。意味が分からない英語を毎日1時間、1年間聞いたとしても、おそらく

英語のリズムは習得できるかもしれないけれども、話せるようにはなりません。これはなぜかという、繰り返しますけれども、ここには場面がないから。どのような場面でどのような表現を使っているかという情報が全く不足しているので、それでは言語習得ができないのです。使う場面がないと難しいのです。

はい、次に、SLAの研究成果（4）に行きます。（4）は、「外国語学習は幼少期から開始しないと遅すぎる、ということはない」というものです。何か否定形がいっぱい続きますけれども、要するに、外国語学習は何歳になってからでもできますよ、ということをお願いしたいのです。別に、私たちはその言語のネイティブスピーカー並みになる必要はないわけです。それは上手になればなるほど良いかもしれませんが、ネイティブスピーカー並みにならなくても、外国語を使っていけます。中学生になってからの学習でも英語の上級者になれます。そして、勉強の仕方次第ではとても上手になれます。

ただし、研究者が研究対象とする言語習得でいうところの「臨界期」というのは、その言語が母語話者と全く同じように習得できる期間のことです。ですので、そのような期間というものはあるかもしれませんね。これは、人間が生物としての生き物ということを考えてみるとあるかもしれない。特に音声面ではあるかもしれない。

パワーポイントのスライドでは、「でも、少しぐらい日本語なまりがあってもいいじゃないか！！」と「感嘆符」を二つつけておきましたけれども、要するに、我々は、別に母語なまり（accent）があったとしてもいいではないかということです。日本でやっている英語教育というのは、ネイティブスピーカーと同程度の英語能力を身につけるための養成ではないでしょうか。特に、小学校での外国語活動や、中学、高校の学習指導要領では、態度面も含めて、一生懸命話そうとするとか、堂々と話をするとか、そのような面も強調されているわけです。若干間違えるところがあってもいいではないですか、ということです。繰り返しますが、中学校からの本格的な英語学習であっても、やり方次第ではとても上手になることができます。

はい、次に（5）に行きます。「やる気があれば上達するわけではない」というトピックです。「いやいや、やる気があれば大抵のことはできる」と言われる方もいらっしゃるかもしれません。で、私も時々学生に「もう少しやる気出せよ」と言ったりします。でも、「やる気」だけあってもだめだと思います。そこに、努力が伴わなかったらだめでしょう。努力しなければ、やる気があっても上達しない場合がよくあります。そして、相応の時間をかけることです。

つまり、学習する時間量の問題ですね。「やる気だけあっても学習しなければ上達しない」ということです。やる気だけあって、「やるぞ、やるぞ」と言ったところで、勉強しなかったらだめですね。特に外国語学習のときは、学習時間量というのは、効率よくという課題はありますけれども、やはりどれだけ勉強したかということと関係してきます。やる気だけあっても勉強しなかったらできるようにはならないよという、何か当たり前のことを言っていますけれども、そういうことですね。余談ですが、私のスペイン語の勉強と一緒に。私は、「スペイン語を勉強しよう、勉強しよう」といつも言っていて、いっぱいいろいろな参考書も買っているのですけれども、勉強量が少ないので全然上達していません。

次に、（6）に行きましょう。これは、「文法を意識的に学習し、最初は使えないけれども、まず知識として知っているということは、そのあと、大量にインプットを受けられる環境に移った際、『正確性』を伸ばす上で有効である」という主張です。何かちょっと堅く書いてありますけれども、要するに簡単に言うと、文法をきちんと習うのは重要だよという意味です。文法をしっかりと習っているのは、長期的にその正確性を伸ばす上で重要だということです。もう一つはフルーエンシー（fluency）、要するに「流暢さ」とか「なめらかさ」というのがありますね。間違ってもいいから、とにかく自分の言いたいことを話せるということ。このようなことももちろん大事です。フルーエンシーと文法学習とは直接的にはあまり関係はないと思いますが、正しく話すということの基礎になるのは、やはり、文法を意識的に学習し、最低でも「知識として持っている人」だということです。

たとえば卑近な例でいうと、日本にいたときに英文法の知識がしっかりとあった人が留学した場合に、そのあとしっかりと正しく英語を話したり書いたりできるようになる可能性がとても高いということです。だから、そのような意味で文法というのは大事なのです。しかし、このように文法学習を礼賛すると、「文法のための文法学習」に走ってしまう先生も出現しかねないので、それは気をつけてくださいということです。そういう無味乾燥な言語学習は面白くないだけで

なく、身につかないですからね。例文に。文脈なしに he とか she とかやたらに出てきて、誰のことを指しているのかよく分からないのに、He is running now. とか言われても、「誰が走っているのだろう？」ということになってしまいますよね。場面がちゃんと作られないとだめだということもここでも繰り返します。

それで、パワーポイントには例を二つ書いておいたのですけれども、この Schmitt という、これは今もハワイ大学の先生だと思えるのですけれども、Schmitt が 1980 年代に研究した被験者で、Wes という日本人、これはニックネームですけれども、Wes は中学もろくに行かないような人だったようですが、20 歳を過ぎてからハワイに渡りました。「絵描きになる」と言ってハワイに渡った人なのです。この Wes の英語習得過程を Schmitt は研究したのですけれど、Wes は、結局、ハワイに何十年もいた後も、英語を文法的に全然正確に話せないのです。ずっとブロークンのままなのです。それからもう 1 つ、Ladiere という研究者が調べた、この Patty という人も、ずいぶん長くアメリカにいて、あちらで、この人は修士号も取っているのだけれども、先ほど出てきた文法形態素がいつまでもずっとつけられない状態が続いているのですよ。過去形の動詞が必要な個所で全体の 3 割ぐらいしか、過去形の -ed とか、そのようなものがつけられない人なのです。

ここで、この 2 名の被験者に共通しているのは何かというと、先ほど出てきた、「意識的に学校教育のようところで文法学習をしていない人」ということなのです。もちろん、被験者が 2 名しかいないではないかというご批判はあるかもしれませんが、でも経験的に、やはりしっかりと文法学習をして知識として持っているということは、そのあとの文法的な正確さを伸ばす上で、やはり有効な方法であるというようには思います。もちろん、ベストな状態は、知識としても持っているし、使えるようになっているということであることは間違いありません。ここで言いたいことは、知識として持っている人のほうが、持っていない人よりも、インプットを大量に受けるようになったときに有利に働くということです。そのように考えると、大人になってから、無意識的に文法規則を口頭インプットからピックアップしていくことが難しくなっているのかもしれない。

さて、ここから、「私たち日本人が身につけるべき英語能力」について少し議論したいと思えます。皆さんは、「英語能力をつけたい」と言った場合に、それはどういった英語能力を頭の中に思い浮かべて言っていますか？ 「英語で専門書が読める能力」も、その内の一つですね。また、「自分の研究内容を英語（外国語）で発表したい」と願う人もいるでしょう。そうすると、まず論文を書かなければいけないので、「専門分野の論文を英語で書ける能力」というものまで希望する人もいるかもしれません。さらに、「映画を字幕なしで理解できる能力」や、「アメリカで、電話でピザが注文できる能力」というものもあるかもしれません。ピザでもなんでもいいのですが、食べたいものを注文できないと、結構情けないですよ。

私は、アメリカでバニラアイスクリームを注文できなかったのが、今でも印象深く残っています。21 歳のときに初めてアメリカに行ったのですが、売店のお姉さんに、「バニラアイスクリームをください」と言ったときに通じなかったのがすごくショックでした。アイスクリームも買えないのかと思いました。同様に、アメリカの大学で、「図書館はどこ？」と現地の大学生に聞いたとき、ライブラリー (library) の「L」の発音ができなかったせいかもしれませんが、何度も「ライブラリーはどこですか？」と言ったにもかかわらず、相手から「??？」と聞き返されたのがすごく情けない思い出でした。だから、アメリカで、電話でピザが注文できる能力なども大事ですよ。そして、バニラですが、発音は vanilla ですから、日本語にはない「v」という音も含まれていますけれども、アクセントが日本語のバニラとは異なり、バニーラとなりますね。私は日本語的に「バニラ」と言ったのです、だから通じなかったのだと思います。さらに、目指す英語能力として、「自己紹介できる英語能力」とか「アメリカの大統領選について議論できる英語能力」といったものもあるかもしれません。

これらの目指す英語能力は全部質的に違いますね。皆さんは一体どのようなことができると「英語能力がある」とかいうような判断基準にしますか？ たぶん、その基準は人によって違うのではないのでしょうか？ 人によって目指している到達目標が違うのではないかということをお願いいたします。だから、「英語ができる」というのは何でしょうか？

それで、我々は言語能力を 4 つの能力に分けて考える方法をよくします。「聞く能力」「読む能力」「話す能力」「書く能力」です。それから、この分類とはまたちょっと違う角度から、「文法能力」とか「語彙能力」とかのように分類する場合があります。それから、話したり書いたりする

場合には、その中身が重要となってきますから、「世の中の物事に関する一般的な知識」というのも、外国語能力には関係してきますね。ことばを使って何を話すのかということです。何も話すことがなかったら、結局は日本語でも英語でも話ができないわけですから、背景知識というか、一般常識というか、世の中についてどれほど知っているかという能力も、英語ができるというものの中的一个だろうというように思います。

それで、私の発表の冒頭で手を挙げていただいたのは、大学生がどのぐらいいるかということを知りたかったのですが、今から「大学生が身につける英語能力というのは何だろう」ということの話をしていきます。これは、静岡大学もそうなのですが、今、大学生が身につけなくては行けない外国語能力という話が、よく大学改革の中で出てきますが、それとも関係するのです。皆さんは大学生として、または、皆さんが大学生だったとしたら、どのような英語能力があれば大学生にふさわしい英語能力であると考えますか？

私が思うには、まずは、「自分の関連したよもやま話が書けたり話したりできる」、つまり、自分にまつわるいろいろな話、よもやま話を話したり書いたりすることができるほどの英語能力が身につけていけばいいと思います。だから自分について聞かれたり、自己紹介をしたり、自分にとにかく関連するような話を書いたり話したりすることができる、ということです。しかし、これだけだと別にどうということではなくて、普通の英会話学校でもやっていると思いますね。で、学問をしている大学生ということを見ると、もう一つ重要なことがあると思います。それは、「自分の専門分野を英語で読め、書け、聞き、話すことができる」ということです。このような英語能力を大学生が身につけないといけないのではないのでしょうか。

すべての分野の内容を英語でできることは、ひとまずは目標にする必要はないと思います。例えば工学部の学生がいたら、工学部で自分がやっている専門分野の話を、英語でできたり書けたりする能力。そのようなことです。人文科学部の学生がいたら、自分のやっている、例えば文化人類学をやっていたら、自分の興味を持つ基本的な文化人類学についての話ができたり、書けたり、聞けたりするという、そのようなことですね。そのような能力を、「アカデミックな英語能力」といったりしますね。これをまず、目指すことが大学の英語教育の役割だと思います。それで、違う分野のことはそのあとにもし勉強したければ勉強すればよくて、ひとまずはする必要はない。大学生にとっては、この2つのことができればいいのではないかと思います。

さて、第2言語習得の話はこれぐらいにして、今日の演題の本筋である「日本にいて万人に有効な英語能力を画期的に伸ばす方法があるかどうか」ということのお話に変えたいと思います。しかし、最初から落胆させてしまうかもしれませんが、もしそのような画期的な方法があったら、さっそく私が本に書いて売ります。このような方法はなかなか難しいです。今日この企画をしてくださった原沢先生には申し訳ないですが、私も一応研究者の端くれなので、嘘はつけないので言いますが、画期的に伸ばすというのはなかなか難しいですね。いろいろ違うから、皆さん、状況が。状況が違うから、単一の方法はないという、そのようなことです。

でも、帰国子女の言語習得が参考にはなりますね。帰国子女は、なぜ英語など、ドイツに行けばドイツ語でしようけれども、フランスに行けばフランス語ですが、現地の言語ができるようになって帰ってくるのか、という事実を参考にするのがいいことだと思うのです。それで、ここで帰国子女の第二言語能力について考えてみる。なぜ、帰国子女は英語ができるようになっているのか、もしくは外国語ができるようになっているのかということですね。今日のフロアーの方の中にも帰国子女の方がいらっしゃるかもしれないので、ちょっと失礼な言い方をするかもしれませんが、帰国子女は必ずしも頭がいいわけではないですね。もちろん、頭のいい人もいますが、普通の人もいます。

けれども、一般的に、2年は最低かかるとは思うのですが、小学校の年代の子が英語圏に2、3年行って日本に戻って来ると、英語がとても上手になっています。私などは到底かなわないくらい上手に英語を話すわけですね。しかしながら、世の中の諸般については、私のほうがきっといろいろよく知っているとは思っています。小学校3年生に比べて私のほうが物事はよく知っているのに、なぜ英語能力は負けるのだということですね。

そうすると、ここで何が違うのかということを見ると、やはり、英語に接する量的な問題ですね。帰国子女は、英語圏で暮らしていた期間に圧倒的にインプットやアウトプットが多かったわけですね。私たちが中学で英語を習う時間数は、帰国子女の数週間分にしかありません。中学校3年間に教室で英語を勉強する時間量は、帰国子女の英語圏での滞在で考えると、その子が例

えば1日で8時間ぐらい英語を聞く環境にいと仮定してみましょう。一方、中学3年間でトータルでやる英語の時間というのは、今ちょっと増えましたけれども、昔は年間で105時間だったですね。そうすると3年間で315時間とかそのようになりますね。今は、年間140時間だから420時間ぐらいなのですね。420時間を8時間で割ると52ぐらいとなり、つまり52日です。帰国子女の2か月分もいかないぐらいの量しかないということになります。こういう事実があるにもかかわらず、文科省といいますか、周りは英語教育に期待し過ぎますね。英語能力に対してね。

しかも、帰国子女の言語使用場面は、先ほどから申しあげていますように、その使用場面がしっかりしている。それで、これも先ほど申し上げたけれども、音声と意味と文法の、この三つがそろって言語というのは成り立つものであるから、この「意味」の部分が欠けてしまった教授方法をとると、非常に能率が悪いということですね。だから音声と文法と意味の、この三つを併せたやり方ができないと、なかなか効率よくはいかないということです。文法だけやっていると、退屈になってしまうし、「覚えろ、覚えろ」と言ってもなかなか覚えられないということです。もう忍耐強い子だけができるようになってしまうという、拷問のようなことになってしまうので、もう少し意味の部分を工夫をしないといけないという、そのようなことが言えそうです。だから、「意味を伴う場面でたくさん使用する機会がある」のが帰国子女です。帰国子女というのは、量的なものが豊富だということと、それから場面があるという、そこですね。

そうすると、日本にいても、使用する文脈が整っていて、毎日使用できていれば、かなりいい線まで行くはずですよ。とはいえ、それは理想であって、それを望むのはなかなか難しいですね。でも、ただそれで難しいと諦めるのもよくない気がします。また、勉強するならできるだけお金がかからない方法がいいですね。貧乏な人にもできるような方法でないといけませんよ？ お金なくても勉強できるようにしてあげないとだめなのです。それで学校ではなくて家で、家でいいですか、1人で何かできるような方法のほうがいいわけですよ。5人いないとできない方法とか、そういうのは良くない方法です。そうすると、1人でできて、お金がかからない方法が何かあればいいということになります。これはちょっと欲張りですけども、このようにできると、自分でやれるのではないかと。結局、自分でやらないと、学校の勉強だけで全部というのは、量的に少なすぎるので無理がありますね。学校の場合はミニマムなことぐらいしか時間的にはできないので。そのような意味です。まあ、そう考えると、学校では集団で有効な方法、タスクとか、そういうことを主体にするのが良いということになりますし、自宅で復習できる課題を与えてあげることが大事だということが導き出されます、余談ですが。

さて、それで何かいい方法はないかという話なのですが、一つ注目されているのは、「音読」だということです。音読です。何か当たり前のことだと言われそうですけれども。でも今までは英語教育だけではなく、国語教育などでも、「声を出して読みなさい。効果があります」とか言ってきたと思いますけれど、それは経験値に基づいて言っているだけであって、本当に効果があるかどうかというのは調べられてこなかったわけですね。それで、最近になってようやく客観的に調べるようになってきました。つまり、長い間、音読がいいと言われ続けられてきたけれども、本当に音読がいいのかどうかというのを、最近、ここ10年ぐらいで研究者たちがデータを収集することで調べるようになったということです。やはり客観的なデータで物事の事実を言わないと、結局は誰も信じないですね。「このようにいい方法があります」と言われても、それが本当かどうか分からないとなってくると、怪しげな宗教ようになってきてしまうので、危ない。本当に効果があるか客観的に調べないといけません。

それで、個人的には「音読は万能ではないかもしれないが、比較的よい方法かもしれない」と思っています。「万能ではないかもしれないけれども」という意味は、先ほど申し上げたように、いろいろなケースがあり、すべての言語領域で万人が上達できるかどうかは分からないけれども、比較的よい方法かもしれないという意味です。実際に、現在、たくさんの実証データが出てきており、音読の効果についても明らかになりつつあります。全体的には、「効果がある」という研究報告が多く出されています。もちろん、中には「効果が認められなかった」という報告もあります。この件に関しまして、後でもう少し詳しくお話をします。

音読の良さには何があるかということ、声を出して英文を読むということですね、単純に言えば。ですので、声を出して読むわけですから、そのときにはずっと自分の声で、インプットを得ているわけですね。また、声を出すので、自分の発音にも気をつけるようになります。これは、今日は高校の先生もいらっしやるので申しあげますと、高校の英語教育では中学校に比べると英語を

声に出して読まなくなるのです。どんどん、どんどんと声に出して読まなくなる。これは非常に悪いやり方ですね。黙っている、授業時間中ずっと。日本語は話しますけど。私からするとこれは非常に悪いやり方です。声を出して読むというのは、中学校では今は多く取り入れるようになりました。高校とか大学などでもそれを見習って、取り入れてやらないといけません。そうすると、発音とか気をつけますね。正しいかどうかと気になりますね。それから自分の声を自分の耳で聞くわけですから、listening の練習にもなるということです。そして、1人で学習できる。まだ利点があるかもしれませんが、音読はこのような良さがあるやり方ですね。

それで、音読、音読と言いますが、いろいろな音読の方法があります。このパワーポイントに載せました最初の「コーラス・リーディング」というのは、これまでも教室でよくやってきたもので比較的なじみのあるものですね。先生のあとについて、または生徒だけで声をそろえて句や文を音読することです。次のは「バズ・リーディング」。これは生徒各自が自分のペースで音読する方法です。次のは「四方読み」というものです。これは、向きを変えて、「生徒は起立し、各自が音読をし、パラグラフ単位などで体の向きを四方に変えていく。教師はその向きで各生徒の音読の進捗状況を把握する」というものです。最初にこちら向きで読んでいて、ワンパラグラフ読んだら向きを変えなさいということです。そしてまた、パラグラフ読んだらこちらに、また読んだら、また向きを変えてという風に。これを私は見せてもらったのですが、最初は何だろうと思ったのですが、ずっと単調に音読していると退屈になるから、気分転換に向きを変えさせるのだということが理解できるようになりました。先生からすると、生徒がどこを読んでいるか分かるから、進捗状況が分かるといいますが、どのあたりがよく分かるから一石二鳥なのだ、とその先生は言っていました。なるほど、とうなずきました。

次ですが、「リード&ルックアップ」。この方法も比較的ポピュラーなものです。生徒は語句または文を黙読し、すぐに顔を上げてその部分を声を出して言う。最初はテキストを見てある程度覚えて、それから前を向いてその部分を発音してみるというものです。リードしてからルックアップだから。次は「レシテーション」。これは暗記といいますが、生徒は、まとまった英文を暗唱し、できる限り感情を込めるなどして自分のことばのように語るというのが、レシテーションです。

それから、「シャドウイング」というのは現在、割と注目を浴びていますけれども、これはなかなかやり方が難しいですね。教師やCDの英語を聞いてすぐに影のように追いかけて口に出す、というものです。これは結構難しいです。聞きながらちょっと前のことを発音しないといけませんから。シャドウイングというのは、言うほど簡単ではないです。音読のやり方でも、今パーッと挙げただけでいろいろな方法があることがご理解いただけたと思います。様々な音読の方法を工夫してやるといいのではないかと思います。

ここからは、「音読をする上で気をつけること」をお話したいと思います。ただ単に声を出して、機械的にずっと読めばいいというものではないと思います。それではとても単調な方法になってしまい、学習者はすぐに飽きてしまうでしょう。やり方で、文の前から、要するに先頭から、意味を理解しようとして、つまり英文の意味を理解しようとして音読しないとだめですね。ただ単に読んでいただけではだめで、意味を考えながら、どのような意味か考えながら、前から前から声を出して読んでいくというやり方をしないと、だめです。だから意味をいつも考えてやらないとだめということです。これを忘れて、ただ単に声を出して読むだけというやり方をしてしまうと、「教科書を1回音読しなさい」とか言って、それで終わりにしてしまうようだと、本当にちゃんと身につけているかどうかは分かりませんね。声を出して読むだけではだめです。意味の理解。これがすごく大事ということです。

それで、要するに、英文の意味を前から前から取るようにやらないといけません。だから、英文をあらに行ったりこちらに行ったりして解釈するのはだめです。そのような読み方はもうすごく意味理解が遅くなるし、実際についていけない。結局、日本語で解釈する癖から抜け出せないわけで、いい方法ではないですね。『すてきな日本語訳』を求めない」ということですね。素敵な日本語に翻訳できるかということは、これは生徒の翻訳力の問題であって、英文解釈の問題ではありません。英文を前から前から意味を取るようにして、それで意味が分かるようになればいいわけで、そうでないと、とてもではないけれども、コミュニケーションの際に相手の言っていることが聞き取れないですね。相手は待ってくれませんから。いちいち、「ちょっと待って」といって頭の中で翻訳したりしていたらとても会話についていけないということです。

コミュニケーションの訓練のためにも、英文を前から理解するという訓練を自分でやっていくべきです。そうでなければ、長文とか、それからリスニング、例えばアメリカ人のアナウンサーが言っていることを理解しようと思ったり、映画の中の英語を理解しようと思ったときには、とてもできないということです。

もう1つ大事なことを言います。それは、「音読の際には英文を速く読む必要はない」ということです。速く読む必要はない。速く読むのは黙読のときにやればいわけです。なぜ声を出して読むのかといたら、それは発音にも気をつけましょうということでしょう？ 音読は発音の練習でもあるわけです。速く読んだらイントネーションが崩れるに決まっています。そのようなやり方はだめですね。だから、生徒に号令をかけて、「はい、立って」と言って、「速く読んだ者から座んなさい」というやり方は絶対だめです。意味がないです。言語習得の観点からいうと、全く意味がないです。そうではなくて、自分のペースで、特に会話の部分ではその人物になったように感情を込めて、速く読む必要はないと指示し、「読んだら座りなさい」というのだったらいいですけども。大体、「全員立って」といって「このページを読んだら座りなさい」と指示されたら、私のようないいかげんなものは、周りがだんだん座り始めたら、まだ読み終わっていないのに座ってしまいました。私は、クラスの大体半分ぐらいが座ったら自分も座ろうと思って、途中だったけれども座ったり、そういう生徒は私だけではないですよ。こうなってしまうのは意味がないということで、自分のペースで読むということがやはり大切です。または、最初から3分なら3分間という時間を指定して、その時間内は何度も繰り返し読みなさい、というのも良い方法です。そうすれば生徒間に差が出ませんから授業の組み立てもやりやすいでしょう。

さらに、できれば、並行してCDなども聞くといいと思います。教科書だったら、準拠したCDが市販されていたりもしますし、NHKのラジオ英語会話とかはCDがついていたりするし、今はいくらでもこのような音声教材があります。しかもそんなにお金がかからないで手に入れることができるので、発音やリスニングの確認のためにも、できればCDなども聞くといいと思います。

ただ、ここまでお話ししてきて、音読はいいのだということを言っていますけれども、音読に関する未解決な問題もたくさんあります。どのようなことかということ、どれだけの量を音読すると効果が期待できるのかという問題がまず上がります。例えば、「毎日1時間は音読しないと効果が現れないのか」「10分程度でも効果的なのか」「毎日でなくても、例えば週に3回程度でもいいのか」などなど、細かい点までいくと、まだ結論が出ていません。残念ながら、これまでの研究ではそこまでの回答が出ていません。人間相手の研究ですので、思うようにいかないことが多々ありますね。

5年ぐらい前でしたけれども、私の修士課程の学生が音読について調査しました。実験もやったのですけれども、自分が大学院生なものですから、自分で生徒を教えられないので、知り合いの先生に頼んでお願いしてやったという、ちょっとハンディもありました。その実験結果をすべて鵜呑みにすることはできないのですけれども、ここで少々その結果を紹介しておきます。まず、週に2回ぐらい、10分とか15分ぐらい音読をやったぐらいでは、英語力を全体的に伸ばすにはあまり効果的ではなかったですね。週に2回、10分から15分というのは、週に20分とか、25分から30分ぐらいですか。それだと能力を伸ばすには足りないのでしょうか。そうすると、もっとやらないといけないということになりますね。

では、一体どの程度やったら効果が歴然とわかるのだろうかという問題があるのですけれども、なかなかそこまで調べている研究はないといえますか、調べにくいですね。その人が音読によって効果があったのか、ないのかということ調べるには、要するに統制群と実験群を作って、それで統制群と実験群との間に、音読以外のところはすべて同じ条件にして調べないと正確にはわからないですね。そうすると、なかなか調べるのは難しいということがわかると思います。まあ、少しずつしか進歩していませんけれども、あまり少ないと効果がないというのは、どの教授法でも言えるということですね。いろいろな要因があるとはいえ、それでも私は音読は良い自習方法だと思っています。

それから、「英語能力の何に効果的であるか？」という未解決な課題もあります。音読をすると何に効果的なのか、ちょっと考えれば、発音能力には影響を与えるかなどと思うかもしれませんが、でもそれもしっかりと調べてみないと分からないですね。それから、音読するだけでライティングのほうにも影響を与えるかという疑問もあります。音読をたくさん繰り返すことで、文章を書くときにも影響を与える可能性がありますね。インプットをたくさん与えて正しい英語

をたくさん聞くわけですから、正しい英語をたくさん聞くということは、それが身になっていれば、書くときにも、ライティングのときにも影響を与えるような気はしないでもないですね。ですので、可能性としては、そのようなことはある。さらに、音読をしてリスニング能力が上がる可能性だってあるわけですね。これも、本当にそうかどうかは調べないといけない。もちろん、ちやくちやくと調べられてはいますよ、今。いっぱいいろいろな人が調査していますので、徐々にいろいろなことが分かってきましたが、まだまだこれからやっていかないといけないことがいっぱいあるということです。「4技能のすべてに効果的であるかどうかは、今後の課題だ」ということが挙げられます。

ただ、そうは言っても、このように、もちろん課題はありますけれども、私は自分の経験値も含めて、先ほども申しあげましたが、音読というのは決して悪い方法ではないし、効果が期待できそうな、お金がかからないいい方法ではないかというように思います。中学とか高校の先生がいらっしやったら、中学とか高校でも音読をするということを習慣づけると、とてもいいのではないかと思います。家の宿題として、復習で、予習ではなくて復習のほうがいいと思いますけれども、復習で、「今日やったところを何回か音読してきなさい」というようなことを出すことはいいことだと思います。音読をやってくる子が増えてくればいいのではないのでしょうか。

家で1人でできる方法で、いい方法ということで、今回は音読というものを取り上げました。そろそろ時間がなくなってきましたので、まとめとして、「第2言語習得研究から分かってきたことは外国語学習には様々な要因が複雑に絡んでくるため、万人に有効な教授法はおそらくない」ということです。ただし、普遍的に言えることは、意味のある文脈の中でのインプット、アウトプットが少なければ、外国語学習は時間をかけた割には効果が薄いということになります。

接触量というのは、触れるということですね。英語に触れるということですね。接触量を多くするために比較的有効だと考えられる方法に音読があります。ただし、闇雲に声を出して読めばよいというわけではありません。音読をするときに意味を考えながら音読をするということが大事です。そして、発音に気をつけながら音読をするということです。それから自分の音読が適切かどうかを、できればCD等を使用して確認するといった方法なのではないか、というように思います。